
キャンパスライフ

M吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャンパスライフ

【Nコード】

N0424B

【作者名】

M吉

【あらすじ】

大学でロシア語を専攻する作者の、個性豊かな先生とのやりとりや、出来事などを綴ってみました。実話な奮闘記。

第1戦目：ロシアからの挑戦状（前書き）

元々短編でしたが、まだいくつか話があるので、連載にしました。
相変わらずロシア語に苦戦している作者です。

第1戦目…ロシアからの挑戦状

僕はロシア語専攻の大学一年生。僕は思う…人には得意不得意というものがあるということ。

僕の不得意なもの、それはロシア語を学ぶ際に突如として現れた。当初より、僕はロシア語の特異な発音に悩まされている。日本語にはない発音がいくつもあるのだ。とりわけ、33字母からなるアルファベットのうち、29番目の字母は僕の天敵だ。奴と僕の間には越えられない壁が存在する。

そいつの名は「Й」。“ウイー”と読むらしい。

…ウイー？

どんな音なんだろう…未知の発音だ。ウイーではなく、ウイー？

先生曰わく、

「ウの口をしながらイと発音するらしい。」

なるほどね…。僕はすぐに理解した。

「ロシア人は器用なんだなあ」

だがしかし、いつまでもロシア人を尊敬しているわけにもいかない。僕もこれをやらなければならない。よし、やってやる！一種の使命感のようなものに駆られ、僕は果敢に奴に挑んでいった。

敗退。

その上、不幸にも僕は先生の目に留まってしまった。

「ニエニエ、イの口になってます。こうするんです」
彼はそう言って自ら手本を見せた。

「……。」

「わかりましたか？ではやってみて下さい」

致命的だった。全く違いがわからない。しかもいい年して

「ニエニエ」

とか言っている彼に多少動揺していた。それでも彼は大学の学部長だ。実は凄く偉かったりする。

しかし、早く気付くべきだったのだ：「He T（ニエット）」は英語の「no」にあたる。つまり彼は僕の発音が違っていることを指摘してくれただけなのだ。それなのに僕ときたら、

「何言ってるんだ、この先生」

などと思っていた。

気を取り直して再び挑む。

「ウイー」

気持ちの上ではかなりうまく言えているつもりだ。

「よし、今度こそ決まった！」

とガッツポーズをしたくらいだ。だが、どうしてか先生には納得してもらえない。おかしいなあ……。言われるままに、そして半ば躍りになって僕は「ウイー」と言い続けた。時々、

「そう、そうです。いいじゃないですか」

と言われるのだが、やはり僕には何が違うのかさっぱりわからなかった。

先生はいつまでたっても「ウイー」ということの出来ない僕を、見捨てることなくずっと指導にあたってくれた。

そういえば、巻き舌も出来なくて、何度も連呼させられてたっけ。先生には迷惑かけっぱなしだよ。

先生ごめんね。そして有難う：

こうして僕の半年間のロシア語の授業が終わった。

そして今、僕は――：

――依然「ウィー」と発音できないまま、ロシア語暦1年が経過した。

第2戦目…マドロ井とロシア

僕はあの日のことを決して忘れないだろう…。

その日も僕は、いつものように朝からかったるい授業を受けていた。1コマ90分は結構長い…。早く終わらないものかと、それはもう何度も何度も時計を確認した。その間隔は五分置きできくかどうか…。午前中は2コマ講義があるから、つまり最低でも18×2＝36回は時計を確認したことになる。

12…15。

これが解放の合図。

自分の話にすっかり夢中になっている教授は、タイムリミットが近づいていることに全く気付かない様子。放っておけば延々と話し続けそうだ。

だが生徒たちは時間に忠実である。一斉に筆記具を撤収させる。その迅速さは目を見張るものがある。

この音で気付いたのか、教授はようやく話を締める。

それと同時に、今まで本当に聞いていたのかどうか疑わしいほどに、講義室からわっと生徒が流れ出す。

僕もじつとしてはいられない。

いざ食堂へ！

いつものように友人らと食堂のメニューの前に立つ。今日は何かな…。だが、決して買うわけではない。

僕らは弁当持参派に属する。そして何より金がない。財布を出す

のも悲しいくらいだ。メニューを見て気分だけでも味わう…それが僕ら流。

しかしその日学食のメニューは予想外の動きを見せていた。僕の目にとびこんできたのは”マグロ丼”という4文字。

「ふーん、今日はマグロ丼かあ」

あくまでも冷静を装いつつ、内心では、かなり動揺していた。

「くっそ、マグロ丼かよ！見なきゃ良かった」

僕はマグロ丼が好きだ。大好きなんだ。

1人葛藤しながらメニューの前に立っている僕は、食券を買いにきた人たちの邪魔になっていた。だが、その時の僕は完全に冷静さを失い、人のことなど考えている余地はなかった。

そんな時、僕に話しかけてくる人がいた。

「こんにちは。あなたは何を食べるんですか」

あ、あなたは！！優しい笑顔を浮かべるその人は僕のロシア語教師。彼も昼食を取るために食堂にやってきたらしい。

メニューの前に立っていれば、誰だって学食を食べるものだと思うはず。先生も同じように考え、僕に声をかけてきたわけだ。

しかし僕はマグロ丼（をはじめとする学食たち）が食べられない条件を備えている。残念だが諦めなければならぬ。無念…。

「いえ先生、僕はお金がないので食べられないんです」

「おや、そうですか。あなたはかわいそうな人ですね」

！！！！！！

そういう割に先生は笑顔だった。まるで、私はこれからマグロ丼を戴きますがね、と言わんばかりに。

先生はそう言うなり急ぎ足で消えた。きっとマグロ丼の元へ向かったに違いない。

残された僕も持ってきた弁当を食べるべく食堂へ入った。僕の母親の料理だって負けちゃいないぜ！気を取り直してみんなでいただきます。蓋を開けると、冷凍食品さんが並んでいた。

母さん…。

そんな時またしてもあの人がやってきた。学食を運んでくるところだった。持っているのは…

やはりマグロ丼か！！

一度は静まったマグロ丼への想いが再び込み上げてくる。しかもよく周りを見渡すとあっちにもそっちにもマグロ丼を食べる人の姿が映った。

お、おのれええっ！！

僕は急にみんなが敵に見えてきた。実に大人げない。

しかもその後ロシア語を控えていた僕は、確実に先生を見る目が違っていた。

マグロ丼…美味しかったのかなあ…

僕はそれ以後、学食のメニューにマグロ丼があったのを一度も見ることがない。

第2戦目：マダロ井とロシア（後書き）

ロシアはほとんど関係なかったですね。

第3戦目：ロシアからの刺客

僕はロシア語を専攻する大学2年生。お気付きだろうか？そう、僕は無事に進級することができ、はれて2年生となった。ロシア語を始めてからもう半年。ようやく

「公開処刑」

と呼ばれる、録音した自らの声を大衆の前でさらされる恐怖の発音訓練にも慣れてきたところだ。

ふっ、ロシア語も案外ちよいいな、なんて：

僕は2年生になって少しばかりいい気になっていた。

そんな時、衝撃の噂を耳にした。その話によると、

「ロシア語の先生は引退するらしいよ」

何ですと！？折角慣れてきたのに！一瞬弱気になる。だが、しかし！！びびることはない。僕らはあの過酷な訓練（その名も公開処刑）を耐えてきた猛者ではないか！

とは勢いづいて言うものの、僕は少々気がかりなことがあった。

新しい担当の先生に心当たりがなきにしもあらず。ロシア語の先生なんてこの大学に数少ないわけで。

僕らに向けられた新たな刺客は、ロシアからやってきた。今度こそ真正正銘のロシア人。

やはり初めまして、ではなかったのだけど。ロシア史でお世話になった担当教員こそ紛れもなく彼だったのだ。だから彼のことはそれなりに知っているつもりだ。

今ここで彼についての僕の知っていることを整理しておこう。

ロシア人

← 男 ←

日本語を話すことができる

←

その日本語が難解すぎて、初回の授業でロシア史を投げ出した学生多々

今わかっているのはそんなところだ。でも僕はそれで十分だと思
った。

おそらく僕らを待ち受けているのはかなりどでかい壁だ。前に受
講していたロシア史は多数の生徒に「聞かせる」講義だったが、言
語はそうはいかない。少人数な上に言葉のキャッチボールを強いら
れるわけだ。

しかも週3回。軽く泣きそうだ。しかし必修からは逃れられない。
それに、意外と何とかなったりするんじゃないのか？なんて思った
りして。

やっぱり僕は甘かった。

「私がこれから皆さんのロシア語を教えます。前の先生はどんな教
え方をしましたか？」

（僕はこれが正確に彼の言葉を記せたかどうか、正直自信が無い。
だが、精一杯聞き取ろうと努力はした）

『公開処刑』

多分全員の頭を瞬時によぎったことだろう。だが、
「いいですねーソレ。では私もやりましょう」

なんて言われてみる！またあの地獄の日々を繰り返したいのか！？と、僕は意地でもそのことを告げまいと思った。皆もきつと同じ気持ちのはず…

「テキストを暗唱してそれを録音しました」
言っちゃったー！！

必ずクラスに一人は正直者がいるもんさ。

「いいですね、ソレ」

ほら、やっぱり食いついてきた！！万事休す。

第4戦目…ロシアからの刺客2

思わせぶりなことを言って、皆を怯えさせておきながら、彼は前担当の必殺技である「公開処刑」を実行しなかった。彼には彼なりのやり方があるのだ。それは、僕らにとって救いとなり、また、新たな恐怖の始まりをも意味していた。

彼のレッスン。それはいたってシンプルそのもの。会話を主軸にした、参加する型の言語学習だ。だから黒板に書かせるということとはほとんどしない。彼は小さな教室をぐるぐる回りながら、生徒に質問を投げかけていく。だが、生徒は10人。解答したかと思ってもまたすぐ戻ってくる。

「分かりません」

「分かりません」

「分かりません」

ちょっと待ってくれ、皆でパスは卑怯じゃないか！？それはすぐ戻ってくるはずだ。だがここで、僕は重要なことに気が付いた。パスしている生徒の顔をよく見ていると、誰もが面倒がっている、とか授業を真面目に聞いていない、とかそういうものではないのだ。真剣に先生の話を聞いて理解しようとしている。

では何故…？

そういえば、皆首を傾げている。隣同士で顔を見合わせたりしながら、教室内はざわついた空気。

つまり、こうだ。日本語がわからない。彼の質問の意味がわからないのだ。それは僕ら全員一致の意見だ。

このような空気になる時、彼は決まってあることを言った。

「どうしてこんな問題もわからないですか？ さっきやったでしょう。頭悪いですねえ」

確かに僕は少々理解力に乏しいのかもしれない。毎日復習をし、そして宿題をこなしていれば、おそらくはどの授業よりも楽だと感じたかもしれない。しかしそれはあることを前提にしている。

つまり僕ら生徒と先生のコミュニケーションが円滑だった場合の話である。

ここで思い出して欲しい。彼、もとい現ロシア語担当が他に受け持っている講義ロシア史で、何人の生徒が脱落していったかを。

言語を学ぶための媒体として言語を使う。当たり前のことであるが、意外と難しい場面もあるのだ。言語はたくさん存在する。そのうちの二つ、それも地域的にしか使えない言語を母語としているのは不便にも思う。それなら、何故僕は英語を選択しなかったのか。

それは…本当に何故なんだろう。

そこには若干疑問が残りつつも、僕はロシア語を選んだことは決してマイナスではなかったと思いたい。

谷あり、谷ありではあったが、それが、僕ら10人を強く逞しくしてくれたはずだ。僕らはもう誰よりもあの、ロシアからの刺客の言葉を理解できる。それが何の役に立つかって？ それは言えない。

何をやって、何が得られるかは本人次第。とりあえず色々やって

みるのが吉。

第4戦目：ロシアからの刺客2（後書き）

これからロシア語とともにゆきます…
皆さんもどうぞですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0424b/>

キャンパスライフ

2010年10月9日03時18分発行